

極北の民族イヌイトにみる 経済開発と文化再生

Economic Development and Cultural Rejuvenation in Inuit Society

スチュアート ヘンリ
Henry Stewart

極北のツンドラ地帯に分布するイヌイトが、経済開発に関してほかの北米先住民と異なるところは、現代の主體的に資本主義経済システムへ供給できる資源が少ないことと、過疎地帯であるので起業の可能性が限定的であることである。極北地帯に天然資源はあるが、それを開発するに当たって、市場や消費地から遠く離れており、陸路網はなく空輸や海運に頼らざるを得ないという制約がある。

ここでとり上げる開発の事例はあるものの、天然資源の開発による利潤でイヌイト社会が潤う可能性は限定的である。また、いくつかのインディアン集団が進めているカジノやショッピングセンター経営などの第三次産業を営むことは、人口集中地から隔離されている極北地帯のイヌイトには望めないことである。

一方、このような地理的な条件が文化と社会の継承、言語の保持などという文化再生には有利に働いていると指摘できる。イヌイトはほかの北米先住民と同様、長いあいだ同化政策の対象とされ、児童は主流社会の運営する学校へ強制修学させられてきた歴史がある。しかし、主流社会が集住する地域と極北地帯のあいだに広い「緩衝地帯」があるので、ほかの先住民に比べて「伝統」をひき継ぐ環境になっている。

ここでは、イヌイト社会における経済開発——政府援助金をふくめて——をとり上げ、生業活動の現代的な意義などの視点から文化再生の概要を学術エッセーとしてまとめる。

「イヌイト」について

イヌイト (Inuit: イヌイットとも表記する) とは、従来エスキモーと呼ばれてきた極北地帯の先住民のなかで、北アラスカからグリーンランドにかけて分布する複数の地域集団の呼称である。南西アラスカからセント・ローレンス島とロシアのチュコト(チュクチ)半島にかけて分布する「エスキモー」のユッピク (Yup'ik) とその地域集団ユイト (Yuit) は、イヌイトと異なる言語(「方言」)を話し、イヌイトに含まれることをいさぎよしとしない[詳しくはスチュアート 1993a, 1995a, 2000]。

しかし近年、イヌイトは極北地帯先住民の総称として使われる傾向にあるので、ユッピクに限る話題以外は、ここではイヌイトとする。

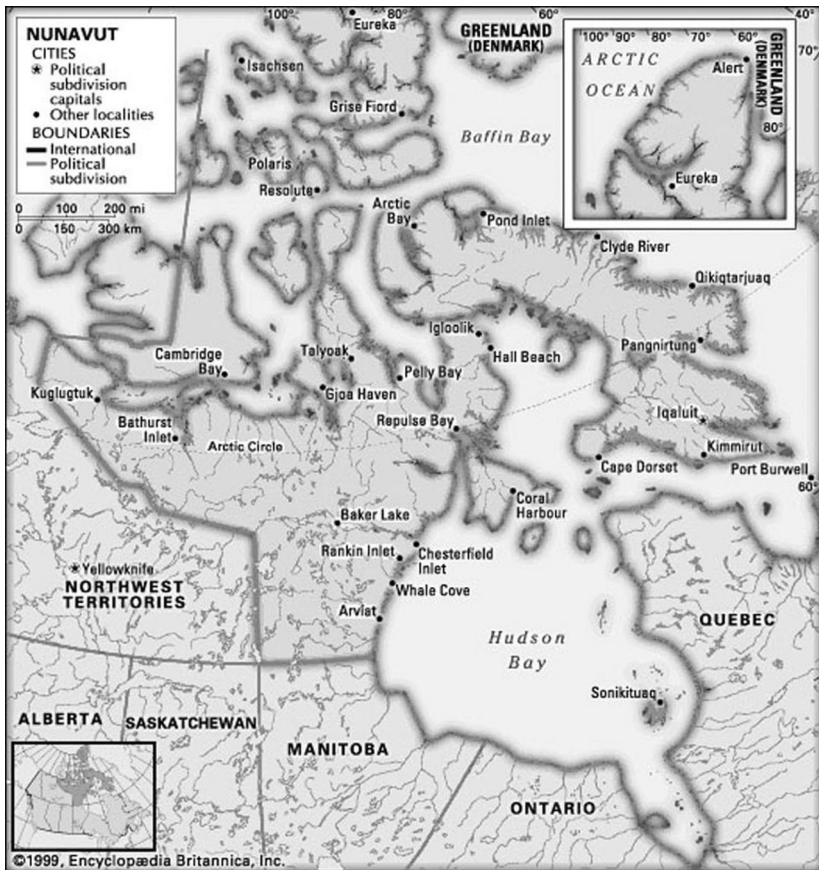
人口に関しては確定的な数字がない。グリーンランドではエスニシティは国勢調査に反映されないこと、イヌイト代表団体がとる統計と政府のとる統計が齟齬をきたしていることが原因である。国勢調査統計や言語学者のデータなどを勘案して、イヌイト／ユッピクの総人口は最大に見積もっておよそ 15 万人、少なく見積もって 13 万人と推定される。

イヌイトはロシアの北東、北アラスカ、カナダの北西準州、ヌナブト準州とラブラドルおよびケベック州の北部、そしてデンマーク領グリーンランドの 4 カ国にわたって、東西 1 万キロメートルという広大な^{デトリリー}領域で生活をしているので、当然なことに地域ごとの環境の違いがあり、多様な生活様式——文化と社会——が営まれている。そのすべてを網羅してのべることはできないので、ここではグリーンランドとカナダ・ヌナブト準州クガールク (Kugaaruk: かつての Pelly Bay) の事例を中心に話を進めていく。【地図 1】

経済開発

ユッピクが分布する南西アラスカと南グリーンランドをのぞけば、イヌイトがおよそ 4000 年前から住んできた極北地帯の陸上は厚い永久凍土におおわれている。高木が育たないツンドラであり、海域は年間の大半結氷している。そのような環境条件によって、20 世紀後半から確認されている鉱物資

源の開発には環境的な制約があり、採掘しても距離と交通手段の問題で消費地へ資源を運びだすことが容易ではない。例外的に海が冬でも結氷しない南西アラスカと南グリーンランドのサケやタラ、カニなどの海洋資源、鉱物資源と油田、北アラスカのボーフォート海から南アラスカへパイプライン輸送される石油、そして道路網が整備されているカナダの北西準州マッケンジー川流域のダイヤモンド鉱山開発などの若干例が知られている程度である。



地図 1 ヌナブト地図

水力発電事業

意外と知られていない、または意外と思われる極北地帯の「資源」の一つは水力発電である。河川が凍りついている長い冬のあいだに水力発電はできるだろうかとの疑問であるかもしれないが、冬は表面が1～2メートル凍っていても、その下に川が流れているので、冬でも水力発電ができる。極北地帯での水力発電事業はモンリオールの北西500キロメートル、北部ケベックのジェームズ湾東岸に水力発電網プロジェクトをもって嚆矢とする【地図2】。そこで大量の電力を必要とする、輸入したアルミニウム鉱石（ボーキサイト）の製錬が行なわれている〔スチュアート 1996a, 2002〕。

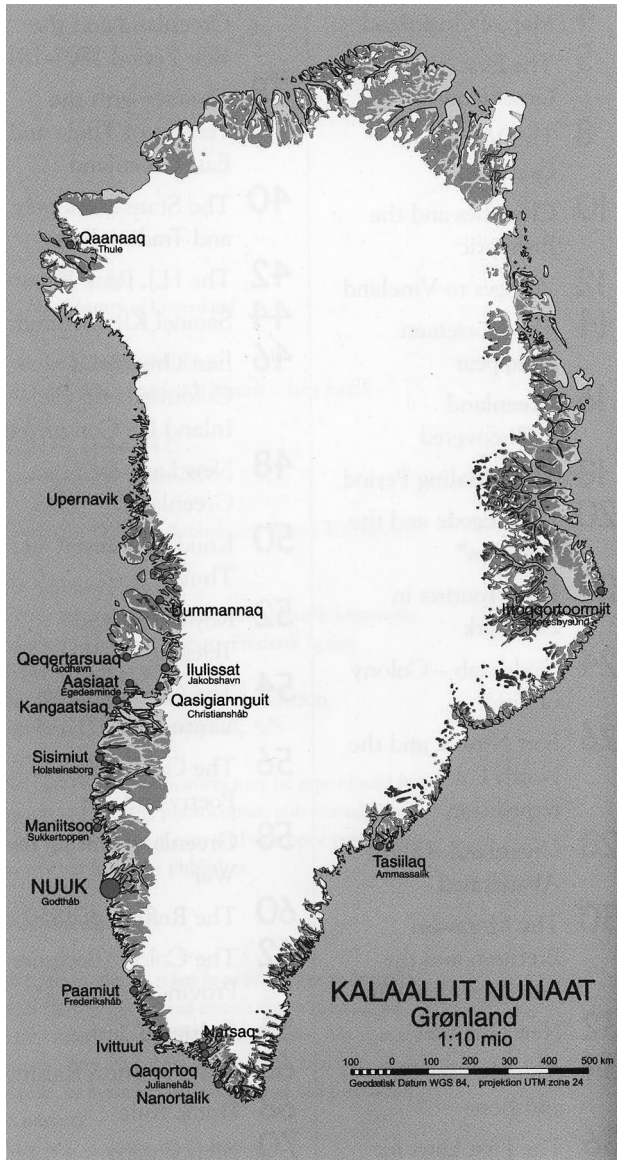
現在、グリーンランドの西海岸地帯でもジェームズ湾水力発電網の規模を上回るほどの構想が自治領グリーンランドの議会で認可される見通しである。地図にあるシシミウト（Sisimiut）地区でニューヨークに本社をおくアルコア（Aluminum Company of America）が水力発電所を建設してアルミニウム製錬を開始する計画である。年間35万トンのアルミニウムを生産する計画では2014年をめぐりに本格的な操業を開始する予定である。

鉱山事業

アルミニウム製錬のほかに、最近にわかに注目の的となっている希少金属のニオブウム、ベリリウム、リチウム、そしてウランの豊富な鉱床が冬でも無氷海域に臨む南グリーンランドで見つかっている。この地域で鉱山業が将来的に発展すると予測されている。また、グリーンランド西岸のディスコ（Disko）湾海底では、操業中の北海油田の石油生産量に匹敵する埋蔵量があることも確認されている。これらの資源開発は周囲の海域が結氷しないことと、油井掘削タワーを破壊する氷山が近年少なくなっている温暖化の賜物だとする意見もある。

高速道路で消費地とつながっているカナダの北西準州西部とヌナブト東部では大規模なダイヤモンド採掘が1990年代からはじまり、2006年現在1200万カラットという世界第3位の生産量を誇る豊富な埋蔵量の高品質ダイヤモンドが採掘されている。

このように資源開発が行なわれているが、官業であるジェームズ湾、国際



地図 2 グリーンランド地図

企業によるグリーンランドのアルミニウム製錬事業や希少金属鉱床の開発、カナダのダイヤモンド鉱山操業であるため、イヌイト一人一人には利益が還元されにくい仕組みになっているが、事業は先住民イヌイトの監視の下で行なわれているとはいえ、操業権そのものは国家や多国籍企業側にある。直接的な個人の利益は雇用の賃金と地域行政機関に支払われる^{ローヤルティ}鉱区使用料程度である。

こうした事情は、本シンポジウムで青柳清孝氏や渥美一弥氏、立川陽仁氏によって提示された事例とは著しく異にしている。イヌイトが自ら運営する企業は小規模であり、全国的、あるいは国際的な企業を運営する事例はきわめて少ない。また、陸上運搬が可能であるカナダのダイヤモンド鉱山や年間を通して海運が可能である南グリーンランドは例外として、資源があっても消費地へ輸送する費用が高くて採算がとれない。極北地帯の奥にあるニッケルなどの重金属の開発はめどが立っていない。

経済開発と気候変動

先住民の経済開発は、気候変動と係わっている側面がある。後で述べるように気候変動（地球温暖化）はイヌイトの文化と社会に深刻な打撃をあたえていると、連日メディアで報じられている。しかし、気候変動をひそかに喜んでいるイヌイトもいる。それは、南グリーンランドのイヌイトである。ただ、気候変動が世界経済と各地の環境に言いつくせない被害を及ぼそうとしている——グリーンランドの氷床が溶けたら世界の海面は7メートルも上がる——ので、公然とその喜びを表わすことははばかれる。

気候変動の影響

一般的にイヌイトは採集狩猟民とイメージされているし、あとで論じるように実際は現代のイヌイト社会では採集狩猟は大きな意義を持っている【写真1】が、南グリーンランドのイヌイトは意外なことに農民である。もちろん、猟、もしくは漁をする南グリーンランドのイヌイトもいるが、主な経済活動はヒツジ放牧である【写真2】。しかも、10年来の気候変動によって年

間平均気温が上がって、春の訪れが早く冬の到来が遅くなっているのに、飼
い葉になる草が膝まで伸び、農作物が育つ期間が1ヶ月も長くなっている。
そのため、1906年に導入され細々と行なわれていたヒツジ放牧が盛んにな
り、グリーンランドのマトン消費量がほぼまかなわれているほどにヒツジ肉
の生産量がのびている。今世紀に入って酪農も行なわれるようになり、ジャ
ガイモの生産高は飛躍的に増加し、ラディッシュやブロッコリが生育するま
でになっている。

ちなみに、ノース（バイキング）がグリーンランドへ進入した1000年前も、
今とあまり変わらない気象条件であり、ヒツジ放牧と酪農を基盤に400余年
にわたる植民地が営まれていたが、西暦1500年頃からの寒冷化のためノー
スは跡形もなくグリーンランドから消えてしまったのである〔スチュアート
1993b〕。

グリーンランドに来る観光客が今世紀に入って150パーセントも増えてい
るのも温暖化のためだとグリーンランド政府は分析している。

これからとり上げる文化の再生にも係わることであるが、グローバルな経
済開発に起因する気候変動がグリーンランドのイヌイトに及ぼしている影響
は、南グリーンランドで温暖化が歓迎されている一方、北部グリーンランド
ではイヌイト社会に壊滅的な打撃を与えている。同じ温暖化でも、北部グリー
ンランドでは経済のみならず、文化の面でも影響は深刻である。「エスキモー
になった日本人」大島育雄氏が住む世界最北の村シオラパルク（Siorapaluk）
ではその影響が顕著である。シオラパルクは主に生業活動——狩猟と漁労



写真1 カリブー猟



写真2 ヒツジ放牧

——を基盤とするコミュニティであるが、その基盤は近年おびやかされている。というのは、食料の大半を占めるアザラシ、セイウチやイッカククジラを海水で捕獲できる海水の範囲が狭まってきているからである。しかも、海が結氷する期間が短いし、氷がうすく氷上の移動は危険をきわめているので、猟は満足にできなくなっている。

この問題に拍車をかけている要因として、北グリーンランドでは生業活動にスノーモービル【写真3】やバギーを使うことが法律で禁止されており、犬橇だけが認められていることが挙げられる。イヌの餌となるアザラシやセイウチの肉は薄い海水の状態のため入手困難になり、猟ができないため不足している。犬の餌が手に入らないため猟ができなくなるという悪循環が現実となりつつある。また、狩猟という生活基盤が失われるとともに狩猟技術が次の世代に伝わらず、文化再生の支障となる。これからの一世代で北部グリーンランドのイヌイトの文化と社会は土台から崩壊していくのではないかと懸念されている。

このように、主に環境問題と注目されている気候変動がイヌイト文化の継承と健康に悪影響を与えていることにも目を向けることが私たちに求められている [岸上 2005: 174-190]。

これまで述べてきた天然資源による経済開発は民族自律には重要な要素ではあるが、政府援助抜きにイヌイトの社会における経済開発を語ることは不可能である。というのは、天然資源開発は限られた地域に偏在しているので、イヌイトの社会全般を支えている政府助成金なくしては、イヌイトが現



写真3 春の雪原を走るスノーモービル

在いとなんでいる生活は維持できない。たとえば、ヌナブト準州政府の歳入は 80 パーセントがカナダ連邦政府からの助成に頼っている。それは、西部でのダイヤモンド鉱山の^{ロイヤルティ}鉱区使用料をはるかに上回る規模である。

漁業などの産業の経済基盤のあるグリーンランド自治政府もデンマーク政府からの助成金——年間 50 億円以上、すなわち総予算の約半分——に頼っている。

経済的に自立していなければ先住民族の文化再生は本来、成立することは困難である。つまり、自立していないと経済基盤を支える政治経済的な情勢によって文化再生の成否は左右されやすい。これは、経済的自立が地理的な条件のため制約をうけているので、政府の助成金が自治政府の歳入の半分以上を占めている極北地帯のイヌイトの場合、とりわけ切実な課題である。

カナダの事例だと、国民総生産（GNP）がおちこむと先住民族への助成金の負担が国民一般の生活をおびやかすという論調が現われる [スチュアート 1997: 246, 2002: 215-218]。イヌイトではないが、オーストラリアでは政権が交代すると先住民アボリジニを対象とする政策がめまぐるしく変わる [Hollander 2008] というように、先住民族はつねに政治と経済状況の有為転変の犠牲になりがちである。

しかし、アラスカ、カナダとグリーンランドのイヌイト——資料不足のためロシアについて言及しない——は政治と経済が比較的安定している国家に属しており、長期的にみれば文化の維持と再生は順調であるといえよう。

以上のことから、宗主国の助成金は極北地帯の現在のイヌイト社会の存続には必要不可欠な条件であることがよくわかる。

イヌイト社会における文化の再生

イヌイト社会の文化再生は、民族語対策、教育政策、生業活動などのいくつかの面において認められる。グリーンランドの北部では「伝統」的な生業活動は危機に直面していることについて上述したとおりであるが、カナダでは「伝統」的な生業活動、そして生業活動を通しての文化再生がカナダ・イヌイト社会に相当な役割をはたしている [岸上 2007: 264-280]。

ここで、岸上が指摘する側面に加えて、生業活動が担う民族アイデンティティを表象する役割をとり上げよう。

文化の維持・再生は言語、政治（統治・自治）、食生活、親族・社会関係、教育、伝承、世界観・宗教や歴史などの多岐にわたり、この小論ではそのすべてをとり上げることは非現実的であるので、クガールクのネツリック（Netsilik）イヌイトの生業活動を中心に文化維持・再生の一側面に焦点を当てることにする。

イヌイト社会における文化の維持と再生を相対化するためにネツリック・イヌイトの歴史の概略にふれることにする。

ネツリック・イヌイト小史

極北地帯に人間が年間をつうじて生活するようになったのは、およそ4000年前のことであるが、ネツリック・イヌイトの分布する地域はそれに遅れて2000～3000年前に人が住むようになったようである。ここでは、便宜的にネツリック・イヌイトの歴史を3つの時期に分けることにする〔詳しくはスチュアート1992, 1995b, 1996b, 2000b, 2006〕。

1. ヨーロッパ人が進出する前の時代

この時代はネツリック・イヌイトの歴史の一部であるので、欧米歴史観に由来する歴史以前、すなわち「先史時代」の名称を使わない。数千年にわたるこの時代では考古学で確認できる物質文化には様々な変化があり、そうした変化から類推して文化と社会の面でも変化があったことは間違いないだろう。しかし、文化と社会の具体的な様子が知られるようになるのは、次の接触期である。

金属器はなく、わずかな流木があったものの弓矢や^{もり}銛、魚^やヌなどの捕獲用具をはじめ、橈も天幕の骨組みも動物の角や骨、牙から作られていた。生業の対象は、生活領域にあるすべてのものであり、陸上ではカリブー、ジャコウウシ、ジリスなどの哺乳類、カモ、ガン、ハクチョウ、ライチョウなどの鳥類とその卵、海ではホッキョクグマ、ワモンアザラシ、アゴヒゲアザラシ、シロイルカ、イッカククジラなど、川ではホッキョクイワナ（Arctic char）、シロマス（whitefish）、マスなどの魚類である。コケモモやクロイチゴとい

うガンコウランなどの植物の実は食用、枝は燃料になっていた。

民族誌にはほとんど登場しないが、私たちの調査によってカモメ、オオカミ、クズリ、タビネズミ（レミング）の肉も、干したホッキョクイワナの骨やカリブーの新しい糞も食べられていた。

2. 接触期

ここでいう「接触」とは、ヨーロッパ人との接触を指しているのである。ヨーロッパ人との出会い以前は、「異民族」だった周囲の地域集団、あるいはインディアンとの交易、交戦などの密度の高い交渉があったので、ヨーロッパ人に出会う前にネツリック・イヌイトを含む先住民族は自己完結の孤立した集団ではなかったことを留意しなければならない。

ネツリック・イヌイトの生活領域にヨーロッパ人が入ってきたのは19世紀のことである。最初は北西航路を探索する探検隊であったが、その後毛皮商人とキリスト教宣教師が次々と現われた。交易、ときには略奪を通じてネツリック・イヌイトが鉄製品や銃砲、織物、小麦粉と紅茶などを手に入れた。生業活動や道具の作り方に変化をもたらしたこれらの物が集団内、そして集団間の関係にも影響を及ぼしたことは言うまでもない。

ヨーロッパ人との接触によって入手した金属で道具を作るようになったが、生業活動の対象はあまり変わらなかった。ただし、毛皮交易を通じて金属などを入手する手段であったので、商品となる毛皮をとるため、それまではあまり重視されていなかったキツネなどの毛皮獣のワナ猟が多くなり、年間サイクルと居住地には変化がおきた。

3. 定住化

第二次世界大戦後、それまで生活物資のある場所、あるいは季節に応じて一年中移動していたイヌイトは、カナダ連邦政府の政策によって30数カ所の村に定住することを余儀なくされた。定住政策の背景にはイヌイトを国民化して極北地帯に対するカナダの領土権を確立させるという、国際政治的な意図があった。

グラスファイバーの船と船外機、スノーモービルなどの機械の普及により生業パターンと食生活に変化が起きた。狩猟・漁撈活動の機械化のために従来の多様な獲物から、効率の高いカリブー猟とホッキョクイワナ漁に生業活

動が集中している。アザラシ猟は後述するように、民族アイデンティティという、ほかの生業活動とは異なる意味で重視されている。

定住するまでは、行動半径は 200 ～ 250 キロであったが、1960 年代に定住化が進み、生業活動の機械化に伴い行動半径は縮小され、現在の日常的な狩猟は通常、村を中心に半径 50 ～ 60 キロ以内で行なわれている。漁撈は 20 ～ 30 キロの範囲内である。機動性が高くなったにもかかわらず、行動半径は伝統時代の半分以下に縮まり、村から離れている期間は長くて 2 ～ 3 日程度で、機動力を駆使しての日帰りの狩猟が目立つ。伝統時代には拠点的な居住地はなかったので、「帰る」という意識はなかったことに対して、現在は定住の村が生活の「本拠地」となっている定住性の生活がイヌイト社会の日常に定着している。

店で買う加工食料品が占める食料全体の割合は狩猟・漁撈による食料を上回る傾向にある。これはとくに 40 歳未満の若い世代においてより一層著しい現象である。加工食料品が好まれる傾向の背景には、狩猟・漁撈による食料が手に入らなくなったからではなく、文化的な要因が強いと思われる。カナダやアメリカのマジョリティ社会がイヌイトの生食などの伝統食生活を蔑んできたという偏見と、100 以上ある衛星テレビの英語チャンネルのコミシャルの影響が強いようである。

民族文化再生としての生業活動

定住化以前、生業は生命を支えるありとあらゆる物資——食料、衣服や道具の材料、住居の建材、犬橇や舟などの材料——を入手する活動であった。生業活動をおこたれば、生存できなかった。定住の初期段階でも、政府の物資補給などの援助はあったが、生業は生きるがため欠かせない活動でありつづけていた。しかし 1970 年代以降、船舶や飛行機【写真 4】による生活物資の補給のインフラストラクチャが整備されると、各村にある店舗【写真 5】で果物、野菜、牛肉、レトルト食品などの食料品、そして衣服、はき物などが豊富にそろえられるようになった現在、生業活動は一生しなくとも何の不都合もなく生きていけるし、そうした生活をするイヌイトが実際にいる。

そこで、生業活動、とりわけ狩猟に新たな意義が付与されている。それは、民族アイデンティティの表象としての狩猟である。その表象にいくつか様相がある。一つは毛皮服、犬橇、雪の家【写真6】というイヌイトのエスニック・マーカーが消えうせている今は、狩猟をすることで自他ともに「イヌイトらしさ」を表示するのである。

アザラシ猟はとくに「イヌイトらしさ」を表象するようになっている。というのは、ユーロカナディアンが好んでおこなうカリブーやジャコウウシ猟はライフルとスノーモービルがあれば誰でもできるのであるが、厚い海水の下で泳ぎまわるアザラシを呼吸穴で仕留めるのに長年の経験と忍耐力が必要とされる。呼吸穴（aglu）というのは、海水がまだ薄い10月に、アザラシが氷に穴を開け、氷が段々厚くなっていく間にその穴が凍りつかないように、穴の水面に張る薄氷をくりかえして割る。アザラシは平常、3～10分おきに空気を吸わなければならないので、広い範囲にわたり厚さ2メートル前後の海水のあちらこちらに呼吸穴を数カ所、ときに10数カ所を開ける。ハンターが寒風に吹きさらされる氷点下の海水上でアザラシがどの穴へ上がってくるのかを感知するのに、経験と長年のあいだに培われた技術が必要であるので、アザラシ猟はユーロカナディアンは真似できない、イヌイトが誇っている民族アイデンティティの表象となっている。



写真4 週に6回の定期便



写真5 極北のマーケット



写真6 イグルー

生業活動によるアイデンティティ表象は、イヌイトをめぐる政治にも活用されている。国家の政治的枠組みの中で、イヌイトなどの先住民には先住権という特別の権利があるが、その権利の柱の一つは生業活動である。イヌイトは現在、衣食住は主流社会と区別がつかないほど似ているので、イヌイト文化の独自性はすでにないとする見方が一部のメディアなどに書かれている。そうした見方の背景には、イヌイトをはじめ先住民に対する政府の援助資金が国民一般の生活を圧迫する要因だとする不満が反映されている。

そのような時局に対して、イヌイトの文化と社会の独自性を語るのに採集・狩猟・漁撈を強調する言説が多く登場する。

採集狩猟民の特別の法的地位を保障する協定の交渉の場において、政府側が先住権を最低限に抑えようとする。その動きにイヌイトは、主流社会とは異なる自然観と生活様式が依然として民族文化を構成する重要な要素であることを強調するために、現在でも生業活動を引きあいに出す。

セントラル・ヒーティングが完備している 4LDK の家に住み、洋服を着て表向きはユーロカナディアンとはほとんど変わらない生活をしているイヌイトが行なうツンドラでの機械や銃を使わないアザラシ猟は、政治的な言説に動員されている。現在のイヌイト社会では狩猟が生存の条件としての機能はなくなっているが、大地との一体化、伝統的な民族知識を駆使した生業活動という言説によって、民族の独自性がエスニック・アイデンティティを支える新しい機能を担っている。

たとえば、イヌイトのリーダーによる連邦政府との交渉、あるいはヌナブト準州議会では、「私たち[イヌイト]は、大地、湖沼と海、鳥獣と一体になっている。私たちは環境の一部であり、環境が私の一部である」(ヌナブト準州設置法案を採決するカナダ下院でのイヌイト議員の発言から)という言説が多用される。元国会議員の Peter Ittinuar は、「イヌイトの文化は大地とは不可分な関係によって成立している」といい、環境との一体感、そして環境＝大地での生業活動が強調される。

このように、生業活動はイヌイト文化の再生には、行動と言説の両面において欠かせない要素となっていることが明らかである。

まとめ

極北地帯には比較的多くの鉱物や油田はあるものの、市場や消費地から遠く離れていることと、環境的な条件のため採掘の費用が高く、採算ベースに乗りにくいので、自律的なイヌイト社会の経済開発は思うようにならない。ただし、21世紀に入って中東などの石油価格が急騰していることと、温暖化によって油田や鉱床が有望視されている南グリーンランドでは採掘は採算ベースに乗る可能性が現実味をおびている。しかし、こうした条件はごく一部の地域に限られており、反対に温暖化は多くの地域では思わしくない影響を及ぼしているので、資源開発から発生する利益を喜んでばかりいられないというディレンマにイヌイトが直面している。

たとえ資源開発が進むにせよ、イヌイト社会全体を見わたすと、所属する国家の援助金に頼らざるを得ない状況になっている。

なお、ここでとり上げることのできなかったツーリズムや「イヌイト・アート」による経済効果については、別の機会に譲ることとする。また、文化継承に深く関係する言語についてふれていないが、8割程度のイヌイトとユピックが民族言語を話し、言語も比較的健在であることを指摘することにとどめる。

文化再生に関していえば、主流社会から隔たっているイヌイト社会では、生業活動は変貌しつつも、まだ盛んである。カリブー猟とホッキョクイワナ漁はライフルとスノーモービル、船外機つき船と網の普及によって手軽に行なえるようになった。一方、機械化に向かない冬の海水上アザラシ猟がユーロカナディアンの追従を許さないことは、イヌイト文化の独自性と、民族アイデンティティの維持・強化と再生という意義をもち、現在も世代を問わず特別視されている。

参考文献

- Hollander, Robyn. "John Howard, Economic Liberalism, Social Conservatism, and Australian Federalism." *Australian Journal of Politics & History* 54.1 (2008): 85-103.

- 岸上伸啓『イヌイット——「極北の狩猟民」のいま』中央公論新社, 2005 年.
- 『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』世界思想社, 2007 年.
- スチュアート ヘンリ「定住と生業——ネツリック・イヌイットの伝統的生業活動と食生活にみる継承と変化」『第 6 回北方民族文化シンポジウム報告——定住と移動』北方文化振興協会, 1992 年, 41-47 頁.
- 「イヌイットか、エスキモーか——民族呼称の問題」『民族学研究』第 58 巻, 第 1 号, 1993 年 a, 85-88 頁.
- 「〈緑の地〉を駆け抜けた人びと——グリーンランドの 4000 年」『アニマ』第 245 号, 平凡社, 1993 年 b, 50-53 頁.
- 「エスキモー」『ブリタニカ国際大百科事典』（第 2 巻）TBS ブリタニカ, 1995 年 a, 62-70 頁.
- 「現代のネツリック・イヌイット社会における生業活動——生存から文化的サバイバル」『第 9 回北方民族文化シンポジウム——ツンドラ地域の人と文化』北方文化振興協会, 1995 年 b, 37-69 頁.
- 「北ケベックのイヌイット——2 つのマジョリティーの間にはさまれる先住民族」『立命館言語文化研究』第 8 巻, 第 1 号, 1996 年 a, 287-307 頁.
- 「現在の採集狩猟民にとっての生業活動の意義——民族と民族学者の自己提示言説をめぐって」スチュアート ヘンリ編『採集狩猟民の現在——生業文化の変容と再生』言叢社, 1996 年 b, 125-154 頁.
- 「先住民運動——その歴史、展開、現状と展望」青木保ほか編『紛争と運動』（岩波講座 人類学 6）岩波書店, 1997 年, 229-257 頁.
- 「エスキモー」など 17 項目, 綾部恒雄ほか編『世界民族事典』弘文堂, 2000 年 a.
- 「考古学資料における交流の読み方——民族学からのメッセージ」小川英文編『交流の考古学』朝倉書店, 2000 年 b, 21-49 頁.
- 「先住民と国民国家——カナダ・ケベック州を中心に」梶田孝道、小倉充夫編『国民国家はどう変わるか 国際社会 (3)』東京大学出版会, 2002 年, 195-224 頁.
- 「定住と生業——ネツリック・イヌイトの伝統的生業活動と食生活に見る継承と変化」『環北太平洋の環境と文化』北海道立北方民族博物館, 2006 年, 277-292 頁.